教員及び学生から見た学校支援ボランティアの現状と課題

帝塚山大学心のケアセンター
研修生　髙　田　莉　恵
帝塚山大学大学院心理科学研究科
中　地　展　生

【問題と目的】

現在，教育現場においては個々の児童生徒の成長や発達過程に応じたサポートの方法を整備することが課題となっている。学校支援ボランティアは児童生徒のサポートのために導入された取り組みであり，サポートを必要とする児童生徒に個別に支援をすることが可能である。文部科学省（1999）によると，学校支援ボランティアは「学校の教育活動について地域の教育力を生かすため，保護者，地域人材や団体，企業等がボランティアとして学校をサポートする活動」と定義されている。中でも大学生ボランティアは児童生徒との間で利害関係がなく，子どもが等身大で関わることのできる“斜めの関係”を築くことが可能である。本研究では大学生が行う，サポートを必要とする児童やクラスへの支援を学校支援ボランティアと定義する。

ボランティア元年となった1995年以降，大学生ボランティアの数は増え，教育現場にも定着しつつある。佐藤・川村（2005）は学生ボランティアの働きに満足していると回答した教員が約70％いる一方で，相談員と学生ボランティアでは生徒の対応や態度に違いがあると回答した教員が60％いることを明らかにした。また，学生ボランティアと情報交換をする時間がないと感じている教員が約50％存在し，インタビュー調査において学生ボランティアへの指示の出し方がわからないと感じている者の存在も指摘した。阪根（2006）はボランティアを受け入れ活用したいと回答した学校が半数以上ある一方で，課題として責任問題の課題があることを指摘している。学生側は研修会等で支援について学ぶ機会はあるものの，実際派遣先の学校でどのような活動をしたらよいのか等の不安を抱えたまま活動を行っていることも事実である。

また，学校支援ボランティアは受け入れる側の学校に利益が期待されるだけでなく，活動を行う学生にも教育現場で実際に児童生徒と接する機会が増える等の利益が期待されている。西松（2007）の調査によると，「学校教育活動の理解」「子ども理解」「子どもに接する不安の解消」「教職志望が高まった」に対して90％以上の学生が当てはまると回答している。さらに廣瀬（2003）は「ボランティア自身の成長や発達といった視点」を重要視しており，互恵性のある活動でなければならないと述べている。このようにボランティア活動が継続して行われる条件として相互に利点があることが重要となる。そのため，学生が学校支援ボランティアに興味を持ち，活動に参加してもらうためにも，現在のボランティア活動の実態を明らかにし，学校と学生の相互の影響を明確にすることが必要となる。

以上を踏まえて，本研究では，学校支援ボランティアの受け入れを行っている学校の教員と学校支援ボランティアを行っている学生を対象にインタビュー調査を行い，教員から見たボランティア活動の現状と学生ボランティアの変化，および学生から見たボランティアの活動についての現状と自身の変化をモデル化する。その上で，両者のモデルを比較検討することで，ボランティ

ア活動によって学校側にもたらされる効果や学生の良い変化だけでなく，相互の活動に対する期待や意識のずれも明らかにし，今後のボランティア活動に関する課題を明らかにすることを目的とする。

【方法】

調査対象者

学校支援ボランティアの受け入れを行っている学校の教員５名（男性２名，女性３名，平均年齢44.2歳，平均勤務年数20.03年，平均ボランティア活用年数3.27年），および学校支援ボランティアの活動を行っている大学生７名（男性５名，女性２名，平均年齢20.43歳，平均活動年数0.90年）を対象とした。

フェイスシート

教員用：氏名，性別，年齢，勤務する学校名，学校支援ボランティアの活用年数，勤務年数を尋ねた。

学生用：氏名，性別，年齢，学年，ボランティア活動をしている学校名，学校支援ボランティアの経験年数を尋ねた。

インタビュー項目

学校支援ボランティアの現状について受け入れを行っている学校，および活動を行っている学生の変化を中心としてインタビューを行うことを目的とし，項目を作成した。なお，教員と学生の両視点から現状を調査するため，インタビュー項目は教員および学生で対応するように作成した。インタビュー項目はそれぞれ以下の４項目である。

a. インタビュー項目（教員用）

1. 学生が行っているボランティアの活動内容について
2. ボランティアを受け入れる前後の学校（児童）の変化について
3. ボランティア学生の受け入れ時と現在の変化について
4. 活動（学生）に期待すること

b. インタビュー項目（学生用）

1. 現在自分が行っているボランティアの活動内容について
2. ボランティア活動開始直後と現在の学校（児童）の変化について
3. ボランティア活動開始以前と現在の自分の変化について
4. 活動に期待すること

調査時期および調査の手続き

2018年９月から11月にかけて調査を行った。教員対象の調査では事前に電話連絡にて同意を得たのち，勤務先の学校へ調査者が赴いて研究についての説明を行い，研究協力の同意書にサインを求めたうえで１人ずつインタビュー調査を行った。なお，調査の時間は40分程度を予定していたが，教員の勤務を考慮し，10分から40分と対象者によりインタビュー時間は大きく異なった。

学生を対象とした調査は大学の授業内，およびボランティア研修会にて調査協力者の募集を行った。同意を得られた者に対して，後日大学内にて再度研究についての説明を行い，研究協力の同意書にサインを求めた上で１人ずつ約30分のインタビュー調査を行った。

調査においては，両対象者ともに上記のインタビュー項目をもとに半構造化面接を行った。

倫理的配慮

倫理的配慮について，本研究は帝塚山大学の研究倫理委員会の承認を得て行った。また，本調査で得られたデータは，本研究以外の目的では使用しないこと，個人情報・プライバシーは保護され参加者の情報は厳重に保管すること，調査への参加は自由で調査途中でも辞退する権利があり不利益は生じないこと，インタビューはICレコーダーで録音を行い研究終了後に録音内容を削除すること，以上の内容を明記した同意書を作成し，調査者が口頭で説明したうえで，承諾のサインの記入を求めた。

分析の手続き

インタビューで得られたデータの分析はKJ法を参考に行った。臨床心理学を学ぶ大学院生６名と，臨床心理士の資格を持つ大学教員１名で合議してインタビューデータの切片化を行った。その後，切片化された全データについて，臨床心理学を学ぶ大学院生７名と，臨床心理士の資格を持つ大学教員１名で，川喜田（1986）および，古田（2016）を参考にして合議と分析を行いグルーピングし，図解化した。

【結果と考察】

教員から見た学校支援ボランティアの現状

教員から見た学校支援ボランティアの現状として，《学校の現状》《ボランティアの活用》《子どもとボランティアの関係》《教員とボランティアの関係》《ボランティアへの思い》《ボランティアの変化》という大カテゴリーが確認された。分析の結果で得られた図をFigure1に示す。

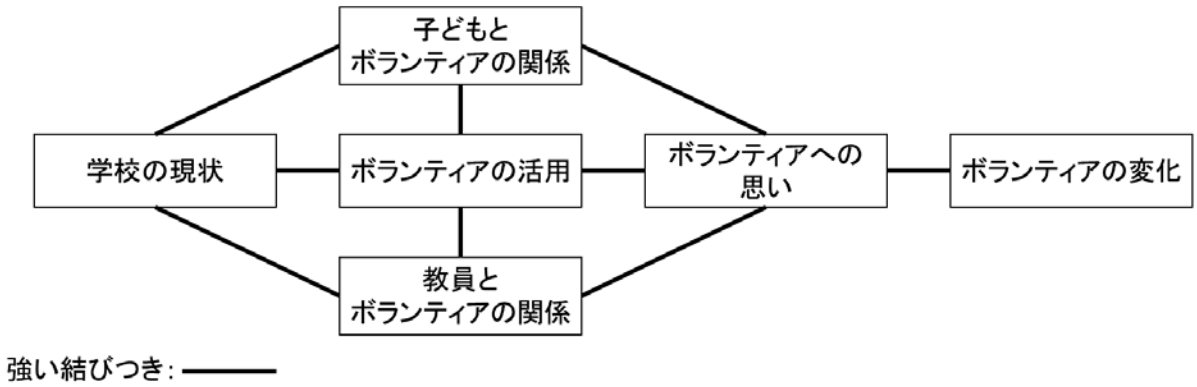

Figure 1　教員から見た学校支援ボランティアの現状

Figure 1について，《学校の現状》が《ボランティアの活用》と関係しており，「学校は教員だけでは成り立たない時代になってきた」というようなエピソードからも，学校支援ボランティアが学校や児童，生徒を支援する中で重要な存在になっていることが考えられる。インタビュー中には教員からボランティアへの感謝も語られ，学校内で学生ボランティアが十分に機能していることが推測される。また，教員からボランティアの変化が語られ，互恵性のある活動になっていることが考えられる。一方で，ボランティアとのコミュニケーションの不足が課題として考えられる。ボランティアの存在が，子どもが授業への集中を欠いてしまうことにつながるなどネガティブな影響もあることが事実として存在する。教員はボランティアに対して動き方の改善など，様々な思いを持っているにも関わらず，時間的限界から十分なコミュニケーションをとることができていないことが学校支援ボランティアの課題であると言えよう。また，教育実習生との差別化も

課題であると考えられ，ボランティアの責任問題や，活動内容の限界の相互理解も課題であると考えられる。

学生から見た学校支援ボランティアの現状

学生から見た学校支援ボランティアの現状として，《ボランティアの姿勢》《活動内容》《子どもとボランティアの関係》《教員とボランティアの関係》《ボランティアの変化》という大カテゴリーが確認された。分析の結果で得られた図をFigure2に示す。

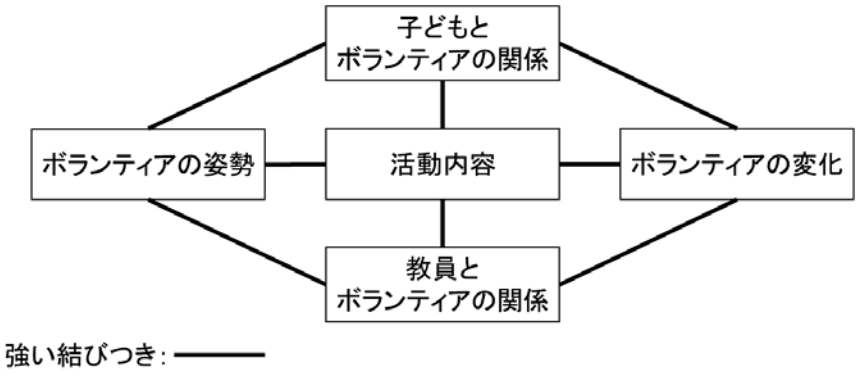

Figure 2　学生から見た学校支援ボランティアの現状

学生の視点からも，《子どもとボランティアの関係》《教員とボランティアの関係》《ボランティアの変化》という教員と共通した大カテゴリーが構成された。インタビューのエピソードからも，ボランティアの良い変化が子どもとボランティアの関係や教員とボランティアの関係に良い影響をもたらしていることが考えられた。

中でもボランティアのよい変化があった者の特徴としては，自分の活動を振り返り子どもの良い面を見るようにしたり，教員とのコミュニケーションを積極的に行っていたことが挙げられる。活動の中の困りごとを教員に相談することが，ボランティアの成長になり，その結果子どもとの関わりに良い影響を与えていたことが考えられる。一方で活動期間の短い学生は，動き方に悩みながら活動を行っており，授業観察で終わってしまったり，子どもへの声掛けがうまくいかなかったなどのエピソードが語られた。学校支援ボランティアが互恵性のある活動となるためには，長期的に活動を行う必要があるだろう。

また，学生側の課題としては，ボランティアに対する積極的な姿勢をどのように培っていくかが重要になるであろう。ボランティア活動を始める前の研修や，活動を振り返る機会を設けることで学生のボランティアに対する意欲の維持につなげることが課題として考えられる。研修内容としては，実際に活動を行っている学生の話を聞いたり，活用を行っている教員の話を聞くことで，活動を行っていない学生の具体的なイメージになる。また，活動を行っている学生は他の学生の話を聞くことで活動を振り返る機会となり，活動の質を上げることにつながることが考えられる。

活動先の教員とのコミュニケーションには時間的限界もある。そのため，活動を行う学生の不安や疑問を解決する場となるような研修会を設けることが必要であろう。また，長期休暇期間には活動先の教員と活動について振り返る機会を設け，今後の活動について相互理解を深めていくことが可能となれば，今後より一層，学校支援ボランティアが学校を支える支援の担い手として機能していくであろう。

両視点から見た今後の課題

本研究では，教員と学生の両視点からボランティアの現状を検討した。その結果，現在の学校支援ボランティアは，受け入れを行う教員と活動を行う学生のコミュニケーションの不足が重要な課題であることが示唆された。コミュニケーションの不足から様々な問題に発展し，課題を抱えながら活動が行われているという現状がある。時間的限界がある中でどのようにコミュニケーションをとる時間を設定していくのかが，今後の課題になるだろう。

また，学校側の希望と学生側の活動の希望のマッチングも重要になるであろう。学校側が教育的な支援を必要としているのか，心理的な支援を必要としているのかなど，依頼の希望をあらかじめ学生が知ることができるシステムを構築していくことで，両者の利益につながることが考えられる。岡山市（2018）は市のホームページ上に各学校園からのボランティア依頼状況を掲載しており，大学生が事前にボランティアの依頼状況を確認できる。このように，学校側のニーズを掲載することで，学校と学生のより良いマッチングが可能となるであろう。

【引用文献】

古田　雅明（2016）．KJ法の臨床応用―実践的な指針の探索　福島哲夫（編）　臨床現場で役立つ質的研究法（pp.21-34）

廣瀬　隆人（2003）．学校支援ボランティアの概念の検討　宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究報告, 10/11（合併号）, 25-34.

川喜田二郎（1986）．KJ法―渾沌をして語らしめる　中央公論社

文部科学省（1999）．「教育改革プログラムについて」 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19991015001/t19991015001.html （閲覧日；2018年６月７日）

西松　秀樹（2007）．学校支援ボランティアの現状と課題　教育実践研究指導センター紀要, *15*, 27-33.

岡　山　市（2018）．岡山市学校支援ボランティア依頼一覧　Retrieved from http://www.city.okayama.jp/kyouiku/shougaigakushuu/shougaigakushuu_00016.html （閲　覧日；2019年２月１日）

阪根　健二（2006）．学校ボランティア活動の実態と課題　香川大学教育実践総合研究, *13*, 15-22.

佐藤　静・川村水脈子（2005）．スクールカウンセリングの創造（4）：学生ボランティアの活用について　宮城教育大学紀要, *40*, 261-368.

【付記】

本論文は，筆頭著者が2019年に帝塚山大学心理科学研究科に提出した修士論文を基に作成しています。調査にご協力いただいた学校の教職員の皆様，大学生の皆様に感謝申し上げます。